

リゅうのひげも (Potamogeton pectinatus L.)

(同上) (縮圖)

邦デハ通常海ニ近キ堤防内ノ水中ニ生ズルガ又時トシテハ野州日光山ノ湯湖ノ如キ山中ノ湖ニ見ル事モアル
(即チ同湖水デハ湖畔ニ湧出スル溫泉ノ影響ヲ受ケテ爲メニ水ノ温^{ナル}ンデキル場處ニ生ズルヲ見ル)、全草沈水シ
其葉ノ下部ハ托葉之レニ沿着シ一ノ鞘ヲ成シ莖ヲ包ミラル特徴ガアル

○斷枝片葉 (其五十六)

牧野富太郎

ヲ翫味シテ讀ンデ見ルト其
様子ガリゅうのひげもニ能
ク吻合シテキルノヲ見受ケ
ル、故ニ私ハ水豆兒ハ疑モ
ナクリゅうのひげもデア
ルト斷定スル事ヲ躊躇セヌ結
果ニ到達シタノデア
リゅうのひげもハ其學名ヲ
Potamogeton pectinatus L.
ト云ヒひるむしろ科ノ宿根
生水草デ廣ク北亞細亞、印
度、北歐、亞弗利加、北米
並ニ濠洲諸地ニ分布シ、我

●茜染

茜染ハあかねノ根ヲ原料トシテ絹布ナドヲ染メシモノナルガ今日デハ之レヲ染メル處斷エテ無クシテ僅ニ在ル有様デ中々得難イガ私ハ先年秋田縣花輪町ノ小田切健造方デ之レヲ絹地ニ染メサセシ事ガアツテ今手許ニ此レガアルガ今日デハ甚ダ珍ラシイ、其色ハ黃赤デ宛モ紅花ヲ以テ染メタ絳絹ノ色ノ槌メタ様デアル、昔ハ茜染ハ普通デアッタガ後ニハ蘇枋ヲ以テ染メタノヲ茜染ト云ツタ場合モアッタトノ事デアアルガ成ル程私ノ幼き時分ニ其シナノヲ見タ事ヲ覺エテキル、東廬子田宮仲宣ガ編シタ『嗚呼矣草』一ノ卷ニ「茜を以染たる絹布とも潮の風にあえはいよく色よく侍るとて船幕を染るは茜を用うる事なり今京師にて茜を以ものを染るに上品を山料茜と稱す古來蘇木の舶來せざる先はみな茜を以染尤城笏山科工みに染出せしにや今は蘇枋を以染しものを郷里により茜染といえるは古名の残れるなめり」ニ茜染ニ就テ此様ニ記シテアル

●あこだうり

あこだうリハ南瓜屬ノ一種デ *Cucurbita Pepo* L. var. *Akoda* Makino. ト稱スル、之ヲ *C. moschata* Duch. トシタ人ガアレドモ穩當デナク此レハ南瓜即チぼうぶらノ學名デアル、此瓜ハ平圓ナ形ヲシタモノデ皮ハ硬ク膚ハ平滑デ熟スレバ黃赤色ヲ呈スル、往昔我邦ニ渡リ來タ事ガアツテ其時ニあこだ即チ阿古陀ト其レヲ稱ヘルタ其後久シク世間ニ跡ヲ絶ツテキタガ近來復タチョイ／＼之レヲ見受ケルヤウニナツタ然シ今日デハ誰レモ之レヲあこだト呼ブ者ガナイ、ツマリ今日ノ人々ハ昔稱ヘラレタ名ヲ知ラズニキルノデアル、東廬子ノ『嗚呼矣草』ニ「阿古多瓜と云ふの夏日よく人の賞翫せしに今は絶て見侍らず随分美味なる物にて其產地より瓜毎に印など押て出せしに近世西瓜盛なりしより阿古多瓜を作らず西瓜は清土にも古く傳はらずと見えて元の世祖西征の後西域より種を中夏に入ると五雜俎に見えたり本朝へは寛永のころ琉球より薩摩へ渡る長崎には慶安の頃漸ととかや京大阪へ来るものは寛文延寶の比勢州津の商賈植初しとぞ阿古多瓜モ今はなきにや」ト見エテキル、貝原ノ『大和本草』卷ノ八ニハ「アコダ瓜 京都ニ多シ南瓜ニ似テ小ナリ味不_レ好其蔓長ク其葉蜀葵ニ似テ大ナリ黃花ヲヒラク南瓜ヲアコダト訓スルハ誤レリ」ト記シ、小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』卷ノ廿四ニハ「又一種アコダウリ

ハ形小ニシテ六寸許正圓ニシテヒダナク皮色赤シ集解ニ或紅ノ字アレバ紅南瓜ト名ヅクベク汝南圃史ニ南瓜紅皮如ニ丹楓色ト云ハアコダウリナリト述ベテキル、又畔田伴存ノ『古名錄』卷ノ四十三、阿古陀ノ『集註』ニハ『殿中申次記』ヲ引テ「六月十八日阿古陀五籠例年進上之八幡田中」ト記シテアル此レガ蓋シ阿古陀トシテあこだうリノ名ノ書カレテアル始メデアラウ、畢竟あこだうリハさんとうぐわ (C. Pepo L. var. Kinogua Makino.)ノ姉妹品デアル

●うけゆり

ズット以前ニ横濱植木會社ノ需メニヨツテ同社ヨリ持テ來ッタうけゆり

ヲ寫生シ之レニ實物通りノ彩色ヲ施シテ同社ニ渡セシニ其圖ガ當時ノ『日本園藝會雜誌』ニ掲ゲラレテ廣ク世ニ紹介セラレタガ此レガ抑モ本品唯一ノ圖デアラウト思フ、頃日『成形圖說』ヲ緋イタラ其卷ノ三十二うけゆりノ記事ガ出テキルガ但花色ガ純白デアルト云フノガ私ノ寫生シタ前記ノうけゆりトハ少違ガアツテ私ノハホンノ微シノ紅色ヲ帶タ白色デアッタ、右『成形圖說』ノ文ハ「承百合 此花は傾き開ず上に仰で托開る故にかくいへり一説に浮野百合の略なり浮野は南島海見島の屬島にて周匝四里九町許なる小島なり此島にこの百合の自生多にありて花さへ香さへ他の所におふるものより勝りたりければ分て名高し浮野を傳信錄國誌略などの書に鳥奇奴と作るは浮野を假字書せしなり 春より芽を生すまた袂百合に似て但葉狹長なり五月の頃花を開く潔白光潤ありて其蕊赤褐色芳香ことに深く遠く聴ゆ花謝てまた莢を結ぶ是亦袂百合の如く平地にては培養がたし」デアル

●あまだまし

あまだましハ亞麻驅ニシテ其草狀ガ亞麻ニ似タ外觀ヲ以テキルノデ其レデ始メ松村

任三博士ガ大學デあまだましノ和名ヲ付ケタガ其時分ニ大沼宏平君ハ之レヲあまもどとト新稱シタ、始メ其學名ヲ大學デ松村博士ガ *Nierembergia gracilis Hook.* トシテキタノデ明治十九年ニ出版ニナツタ『帝國理科大學植物標品目錄』ヲ始メトシテ明治四十五年出版ノ同博士著『帝國植物名鑑』下卷後編、大正五年出版ノ同ジク『訂植物名彙』後編ニハ悉クサウナツテキル、後此レハ *N. frutescens Dur.* デナケレバナラヌコトガ判ツタノデ今日ハ此學名ヲ用ウル事トナツテキルガ尙書物ニヨツテハ偶マ誤用シタ舊トノ學名ヲ今尙ホ踏襲シテキルモノヲ見受



ひめあまだまし
(*Nierembergia gracilis* Hook.)

ケル事ガアル、此あまもど
きハ莖高サ一尺餘ニ成長シ
テ直立シ灌木様ヲ成シ分
枝シテキルガ *N. gracilis*
Hook. ハ其種名ガ如實ニ示
シテキルヤウニ丈低キ小草
デ莖僅カニ高サ五―七寸デ
下部ハ横ニ匍匐シテキル、
私ハ之レヲひめあまだまし

ト呼ンダ、同屬ノ一種ニぎんさかづきト名ケタ一草ガアツテ或ハ盆栽トシ或ハ花園ノ縁ナドニ栽エテアルノヲ
見受ケルガ此品ハ莖ガ地面ヲ這フテ繁殖シ盛ンニ大ナル鐘狀ノ白花ヲ開クノデアアル、此レハ *N. rivularis* Miess.
ノ學名ヲ有スル者デ俗ニ White-Cup ト呼バレテキル、此等ハ南米アルゲンチナノ所産デアアルガ然シあまもどき
ハチリ國ノ原産デアアル、所屬ハなす科 ●黄櫨ハはじのきデハナイ 支那ニ黄櫨ト云フ樹木ガアル、其

材ガ黄色ナカラ布帛ヲ黄ニ染メルニ使用スル、其圖ガ『救荒本草』ニ出テキル即チ *Rhus Cotinus* L. デアル、
我邦デハ古來此黄櫨ヲはじ(同名ガアル)、一名はぜのき(同上)、一名やまうるし、一名はぜうるし、古名はにじ、即チ *Rhus*
trichocarpa Miq. ニ充テ『倭漢三才圖會』ニハ「按ズルニ黄櫨ハ以テ黄色ヲ染ム天子ノ御袍ヲ黄櫨染ト稱ス是

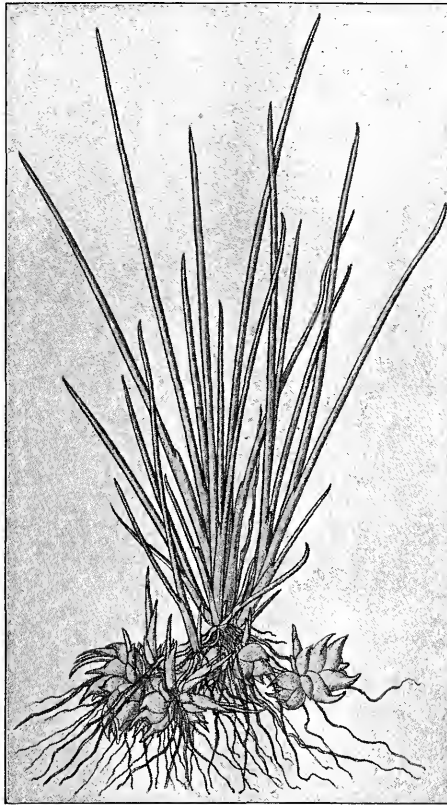
レナリ」漢文ト記シテアル、はじ(ハ)やまうるし(ハ)ノ心材ハ黄色ダカラ之レヲ染料ニ用キ乃チ該樹ヲバ黄櫨ニ充

テタモノダガ其レハ幸ニ同屬ノ品タルハ失ハナカッタガ其種ハ適中シテキナカッタ、サスガニ小野蘭山ハ之ヲ
看破シ其著『本草綱目啓蒙』ニハ黄櫨ヲ「詳ナラズ」ト記シ之レヲはじニ充ツルノ非ヲ明カニシテキル

●ほそばのかうがいぜきしゃうノ一特徴

Juncus papillosus Frach. et Sav. ノ學名ヲ有スルほそばのかう

がいぜきしゃうハ我邦諸州ノ濕地ニ生ジ外觀ハはりかうがいぜきしゃうニ似タ品デアルガ其花ガ三個許小梗頂ニ相聚リ且其蒴果ガ高ク花蓋上ニ超出シテキルノデ直ニ識得セラレル、本種ニハ一ノ殊態ガアル其レハ晩秋初冬ノ候ニ及ンデ其地下部ニ絲狀ノ短匍枝ヲ發出シ其末端ニ肥厚質ノ鱗片ガ層々相重ナリテ白色ノ冬芽ヲ形成スル事デアル、此芽ハ一株ニ多數相



地中ニ冬芽ヲ有スルほそばのかうがいぜきしゃう
(*Juncus papillosus* Fr. et Sav. with the subterranean bulbils.)

群リテ生ジ株ヲ地カラ掘テ見テ此レガアルノニ愕クノデアル、ソシテ此現象ハ夏ニハナク唯年末ニ近ク始テ見ラル、ノミデアル、畢竟次年ノ生存用意ヲシタモノデアル、其レ故花アリ或ハ正ニ成熟セル果實アル際ノ標品ニハ尙敢テ之レヲ見ルヲ得ナイカラ此ノ如キ標品ニ基テノ各學者ノ本種記載文ニハ一切此芽ニ就テノ叙述ガナイノハ寧ロ當然ノ事デアル、故ニ

Juncaceae 即チ爾科植物ニ就テノ權威者ナルサスガノ Fr. BOCHENAU 氏モ此點ニ就テハ之レヲ見逃ガサザルヲ得ナカツタ、私ハ以前東京郊外ノ中野、堀ノ内間ノ地點デ其レヲ採集シ當時寫生シテ置タモノガ此ニ掲グル圖ナノデアアル、近クハ昨年攝州六甲山上ノ池畔デモ亦之レヲ見且採ツタ事ガアツタ